



## 佐世保の街と私たち

ネクタイの色と肌の色……………	木下 尚子… 3
米戦艦ニュージャージー寄港の町から…	内田 佳崇… 4
路傍の花と核と個と……………	池上 洋子… 6
＜あごら＞佐世保と私……………	倉 まつ… 7
＜あごら＞に入って思うこと……………	野本 泰子… 8
このごろ思うこと……………	田中 幹子… 9
＜連載＞働き続けた40年……………	辻 和子… 10
見たぞ!! 恐怖の観閲式……………	山口のり子… 14
夫婦別居の配転、全面勝訴……………	15
あごらのあごら……………	16
女の講座・女のつどい……………	2

今月の編集は＜あごら佐世保＞ 113号 400円



制作 中野寿子さん（111号19ページ参照）



# ネクタイの色と肌の色



木 下 尚 子

中曽根首相の人種差別発言が問題になっている。その割には、同じ日の女性差別発言に対する報道量は少なく、首相ご自身も、失言の度は小さいとお考えのように思われる。

「女性にはネクタイの色は覚えていても……」という発言に、多くの女性団体や女性議員が抗議したが、首相は、「あれはジョークで……」と答弁した。しかし「ジョーク」なら許される問題なのだろうか。

首相の本音は、恐らくそこで笑い声を期待したのだろう。会場でそのとき笑い声があがったかどうかは知らないが、もしも首相の「ジョーク」が成功し、どっと笑い声があがったとしたら、事態はもっと深刻になったはずだ。アイヌ問題で抗議の声があがったとき、首相はマスメディアの歪曲のせいにした。卑怯という以上に事態の重大さに本当の意味で気がついていない人を首相にしている責任に心が重くなった。

外電が、首相の人種差別発言と女性差別発言を強く関連づけて報道しているように、二つの発言の根源は全く同じである。性にせよ民族にせよ異種の者は仲間と考えない、平等と思わない、深い潜在意識があり、それに気づかないばかりか、指摘されても恥とは思わないところに怖さがある。

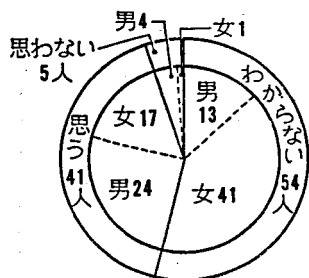
首相発言のその日、おかしさを直ちに指摘したのは女性記者だったという。男性記者たちは気づかなかったのか、あえて紛争する勇気がなかったのか。——せめて後者だと信じた。

寄港の街から

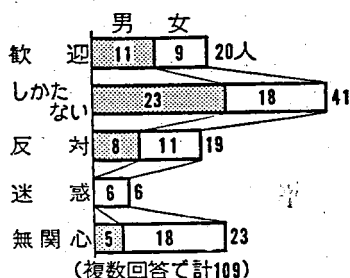
内田 佳崇

十月四日、攻撃型原子力潜水艦サンフランシスコ号が入港しました。八月二十四日に寄港したニュージャージー同様、核トマホーク搭載艦です。街も市民の反応も、まるで他人事のようにです。あの喧噪のニュージャージー入港時でさえ肝心の市民は平静でしたから、

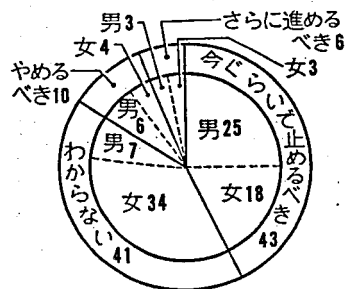
問1 核トマホークを  
積んでいると思うか



問2 ニュージャージ寄港を  
どう思うか(複数回答)



**問 3 今後の日米軍事協力について**



ここに毎日新聞社が行なったアンケートがあります。このアンケートがすべてではないと思いますが、佐世保の一断面を語っていることは確かです。それにしましても、このアンケートの結果を見る人は、多くのなぜ？を問われることでしょう。その答えらしきものを、ニュージャーシー寄港の模様を中心に、私をも含めた地元の顔を再考しながら、出せたらと思います。

八月に入りますと、日を追うことに佐世保は不隠な空気に包まれてゆきました。まず右翼団体（五十七団体四百五十人）のスピーカ一での罵声、海上には警備本部が置かれ、巡

視船・艇など五十一隻が集まって来ました。空にはヘリ機が飛び交い、道路では検問が各所で行なわれています。県警は三千六百人を動員しての厳戒体制です。そのものものしい恰好は街中のいたる所で見られました。

そういうなか、〈十九日佐世保市民の会〉が二百二十三回目のデモを行ないました。わずか五人の行進でした。〈十九日佐世保市民の会〉は昭和四十三年原子力空母エンタープライズ寄港の意味を忘れまいとして、毎月十九日に平和行進をしてきました。一時期四百名を数えた人員も、現在では十名内というところとです。関係者に減少の理由を聞きますと、原潜寄港に対して不感症になっているから、

また、経済的に逼迫しているため運動するゆとりがないのでは、ということです。

佐世保港には昭和二十四年から昨年まで、米軍艦艇入港数は二万八千八百九十五回、昭和三十九年原潜シードラゴン号をはじめとして四十一回という頻繁さです。恐ろしいことです。が慣れが生じてきたのでしょうか。ただ、このことは佐世保だけの現象ではないような気がします。シードラゴン入港時の抗議集会は十万人。今回核トマホークを頭にかかげたニュージャーシー号の抗議集会は一万人と減少しています。米軍の核慣らしの思惑どおり、いつの間にか国民全体が慣れてしまったのでしょうか。

佐世保の経済面を見ますと、現在特定不況地域の指定を受けています。一人当たりの所得は年間百六十二万円（人口二十五万人中約十二万人の申告者によるもの）。唯一の地場産業であるSSK造船所は、造船不況と円高の波をともに受けて従事人員も削減の一路をたどっています。

戦前は軍港、戦後は米海軍基地の街としてのみ経済を支えてきたため、他の市場が生まれないのです。このことは佐世保の体質を形成し、また、多くの問題を生じさせる元凶に

もなっています。

八月二十二日、市長名で、入港受け入れに協力要請のチラシが全世帯に配布されました。いよいよ二十四日、核弾頭も装備できるトマホークを搭載した米戦艦ニュージャーシーが入港してきました。私は後ろめたい気持ちでTVを観ていました。夫の仕事の関係上、絶対デモには行くなという言葉も大きな歯止めにはなっていました。夫のなかに夫の阻止をはね返すだけの確固たるものがいま一つなかったのです。優生保護法改悪反対の時は、夫がなんと反対しようが、街頭スピーチに、ピラ配りに、と跳び廻ったものでした。

TVは灰色の巨体を映しています。

ソ連から核基地と見られても文句は言えないのだ、と思ったり、「望むと望まぬとにかかわらず核が落ちる寸前の状況の中に私たちは生きている」、――誰が言った言葉なのか、ふっと頭をかすめてゆきました。それでも私を駆りたてるものが湧いてこないのです。

TVは入港歓迎派の商工会の人を映しています。不況の佐世保に寄港は特需もあり、経済的メリットも大きいので歓迎ですと述べています。前にも書きましたように歓迎派の意識の下にある、戦後米海軍基地に依存した佐

佐保の体質があまり出された言葉です。

しかし今回は円高で米兵のドル落としはほとんどなく、それでも二億八千万円強だった由。因みに昨年の米軍特需は約百十七億円。余談ですが機動隊関係の宿泊所や弁当屋さんなどは相当な臨時収入があったようです。

次の日、私は新聞の一所を見て釘づけになりました。京都から来た主婦吉田満智子さんの座り込みの写真です。記事を読むにつれ、私の胸の中を新たな痛みと感動がはしりました。それは日を追うことに大きくふくらんでゆきました。

抗議団体は二日後にはきれいに引き揚げてしまい、二十四日の集会はまるで一種のセレモニーの感さえしました。オーストラリアの女性ジョアンナ・ヘイターさんと吉田満智子さんたちの抗議は、出港の二日まで続いていました。これが足を地につけた運動なんだと私は思いました。ヘイターさんは「機動隊があまりにも多過ぎる。これでは、一般市民は怖くて何もできないですね」と言って帰られました。

私の周りには、歓迎する人なんていません。みんな、口をそろえて反対なのです。しかしその声が挙げ難いのも確かです。

軍港・基地として、国の政策・権力が一番濃く塗られた街は、保守体制が非常に強く、そのうえ、その政策に頼らざるを得ない生活が二重三重に私たちの声を塞ぐのです。しかし私たちの街は私たちが守らなければ。この街で生きている子どもたちのためにも。それには、ひとりひとりが意志表示をしなければ賛成と同じことなのだと思います。一時的な感情の高揚ではなく、私は私なりの歩幅で、反核とかかわってゆこうと今は強く思っています。

(軍事研究会佐々木竹一氏をはじめ、多くの方に協力いただきました。誌面をお借りしてお礼を申し上げます)

## 路傍の花と核と個と

池上 洋子

この夏、朝刊の一つの記事が、深く私を捉えた。米戦艦ニュージャーシー入港前日のことである。「女ひとり反核の旅」とタイトルして、京都から一人の女性が、抗議の行動に來たと報じた。「一時間でも半日でも参加してくれる人は、いるかもしれない」——彼女のメ

ッセージは、私個人への呼びかけではないかと思うほど、それは充分であった。これなら私にもできる。決意も覚悟も不要であった。ごく自然にそこへ出かけ、連日ほんのひととき、彼女のそばに私はいた。炎天下、市役所前での座り込みは、その暑さより、人々の視線にさらされることより、何倍も静かであり、豊かであった。

核も平和も何も考えはしなかった。ましてや、子どものことも夕食のおかずのことも。

ただひたすらに無心でいられた。「これは自然なこと」と彼女は言う。無心でいられたことは、つまりこのことが、自然なことだからだと納得した。

//彼女とは、ヘトマホーク阻止京都連絡会の吉田満智子氏その人である。静かな人であった。終始笑顔で、女と運動と行動とを語った。女性解放よりむしろ人間解放であり、生活の中の運動こそほんのものであり、同時にそれは生き方への、向き合いではなからうかと。



その昔、佐世保にはじめて、核を積んだ原潜エンタープライズが入港した時、私もその渦中であつて、権力側による催涙ガス弾に泣かされ、数日視力を奪われた思い出がある。しかしながら、それはあくまでも思い出であつて、組織の動員であつて、私の生き方への向き合いではなかった。

思い出し過ぎなかつたあの日から、およそ二十年が巡り、私は四十歳になった。結婚し、子を産み、子を育て生活の中の諸々の繁雑さにどっぷりとつかっている、主婦そのものになった。主婦そのものの私が、これなら私にもできると思った今回の行動は、動員ではなく、個として、自分と、自分を囲む他への向き合いであり、何よりも生活感覚から一歩も踏み出さぬ普通のあり方であつたことの発見は、新鮮である。

出かけて行けば、誰かと出会う。出会いは拡がりとなつて、生きることをさらに豊かにしてくれる。彼女との出会いは、人は個として生きねばならぬと、改めて教えてくれた。静かで熱い私の夏となつた。

八月末、いつかまた会おうと約束して、彼女は佐世保を発つた。座り込みの間中、彼女

が着用したジーンズのジャケットの背には、「たとえば路傍の花が愛おしいから、反トマホークの闘いには覚悟がある」と、記されていた。

## △あごろ佐世保▽と私

倉 まつ

△あごろ、ギリシャ語では広場という意味なのだそうですが、私にとっては、第二の誕生といつてよいくらいのひびきがあります。

△あごろ佐世保△との出会いは、内田さんとの出会いでした。それまでの私は、自分と生きるというより家族のために生きること、何の疑問ももたず、それでいていつも何かに追われている思いがありました。今、現在を生きていない不満感が常にあり、何かしら、これでいいのか、これでいいのか、という漠然とした焦燥感があり、老いだけのための準備期間中を生きているような、充足しない思いで生活していました。

△あごろ△と内田さんと私とにどういう過程があつたかを書くとなれば、大変長い説明が必要です。そのたくさんの印象深い事柄の

中の一つに、「今しかできないことをしたら」という彼女の言葉がありました。私はその時何をしていたと思いますか。パッチワークの展覧会に行くところだったのです。もちろん、パッチワークもすばらしい。でもそれは後でもできることです。今しかできないこと、今ならまだできることは何だろう。そうしてまわりをぐるりと見たすと、そこにキラキラと輝く世界がありました。その時、誰かのために生きるのはいさう、私自身のために生きよう、と思いました。

そう思つて生活を見直す、私の生活は家族のための生活そのものです。夫が外で気持ちよく働けるよう身の回りのことに注意を払うことに喜びを感じ、また一方では、夫が夜の巷に出没しようがわけ知り顔をし、夫にとつてかわいい奥さん、社会的にもいい奥さんを演じる。楽しい家庭を演出するための様々な工夫、奉仕がありました。それは私自身の喜びのためではなく、家族の喜びのための作業です。もちろん家族が楽しく過ごすことは大切ですが、そこに自分も生きなくては思いました。いつも助演ばかりではなく、気持ちの上では主演になろうと思つたのです。家族の喜びが自分の喜びである：そういう生き

方もあると思いますが、自らの五感を通じての喜びをも大切にしようと思ったのです。

不思議なことに私の場合、そういう風に自分の意志で生きるといことは、自分の感情、感性を解放する作用をしました。妻とか主婦とか母とかの枠を越えて一人の女としても生きようとした時、いままでどこかに隠れていたかのように、様々な感情、感性があらわれてくるのを感じました。

私の変化によって、私にとっての夫像も少しずつ変貌していきます。穏やかで包容力のある男でしたが（と思っていました）、妻がひとたび自分の意志で動き出すと、そういうわけにはいきませんでした。私を意のままにしようとはあらゆることを試みました。お酒の力をかりての有形無形の暴力に、本来こういうところもある人だったのかと目をみはる思いがしました。しかし夫の私へのいろんな圧力は、結局は私を元の妻におさえこむことはできませんでした。それどころかさらに強くさえてしまったのです。

そういう男だったのならなおさらのこと、唯唯諾諾と従っているわけにはいかなのです。従来私は争うことを好まないほうでしたが、この人は言ってもわからない人だ、力の

問題だと判断すると、けんかもやりました。とにかく私はどういう手段をとっても、あなたの言いなりにはならないということをはっきりさせようと思いました。それには大変エネルギーがいりましたが、それでくたびれるということはなく、それがまた別のエネルギー呼びさすのです。私はとても元気になりました。近ごろは会う人ごとに若くなったか言われますが、話半分に聞くにしても嬉しいことです。きつと精いっぱい生きているからではなからうかと思っています。

以前の私だったら、困難をよい人間になることで乗り切ろうとしてきたでしょう。//出る杭は打たれる//ので、目立たないことで生存していく方法です。今は、大袈裟な言い方ですが、切り開いていくという言葉が浮かびます。

自分を解放することによって生じる様々な問題が私にふりかかっています。今の生き方が以前のそれよりも多大の努力を私に強います。夫との葛藤もまだまださけることはできませんが、それでもなお、やはり今の生き方がよいと思うのはなぜかと自分でも思います。それは、自らの意志で生きている、ということに尽きると思います。しんどいといえ

ばしんどいですが、自分でつかみとるという実感があります。毎日を生きているという充実感があるのです。

五年後、十年後の私が何をしているのか、//今しかできないこと、今ならまだこの私にできることをやろう//。

それを私に教えて下さった内田さんに感謝しつつペンをおきます。

△あごろVに入って

よかったと思うこと

野本 泰子

よい勉強の機会を得ました。単なるおしゃべりならば、ほかに機会も見つけられますが、△あごろVには、前進とか、向上とか、目標があるのが魅力です。

特定の本を読んで、それを中心にしてお互いの意見を出し合うことによって、もっと広い世界の中で自分をとらえ直すことができます。そして、私はこうした期待を持って参加しています。目下のところ、ボーヴォワールの『第二の性』の翻訳本を読んでいるわけですが、一人では到底読み終えるのは不可能だ



ろうと思われるこの難しい本も、共に読む仲間がいるから、何とか読み進むことができます。難しい哲学用語なども、私たちなりの解釈ではあっても、考えてみることによって、もしそうでなければ一生素通りしてしまう概念や考え方を、知ることができます。一方、あまり自分と掛け離れたことはできないと感じている私ですが、とかく情緒的に過ぎたり、限られた世界で考えがちな生活を改めて、より多くのもののバランス感覚の中に生きられたら、より悔いのない生き方ができるのではないのでしょうか。愛すべき人を、愛すべき時に愛しているだろうか。怒るべきことに怒っても、その解決の方法を知らず、心の中にうっ積させてはいないか。ほめるべきことをきちんとほめてやっているだろうか。観念論ではなくて、地面に足の着いた生き方をしたいと思います。

## このごろ思うこと

田中 幹子

まず、子育て中の私の頭を離れないのは、真の教育と申しますか、身についた人間とし

ての教育、学ぶ意欲を子どもたち自身が起こすような、子どもは子ども時代を大切に過ごせるようなあり方は、といったことのほか、チェルノブイリ事故を通して、より身近に感じられるようになりました原発のことです。東京の古賀節子様、よく書いて下さいました。拝見致しまして力強く拍手を送りますとともにその輪の広がりを願ってやみません。最近では買物に出かけても多数の商品を前に、これ放射能汚染大丈夫かな、添加物怖いなあ、と思いつめくらは仕方なく買い求めたりしていますが、ほんとうに困ります。自然環境、食環境、大事に考えねばとの思いしきりです。〈あごろ〉では落ちこぼれ会員なので『第二の性』読みあっていますのに、よく読まないで、当日、他のメンバーの方々のお話を、小さくなりながら耳学問です。それがわかるのでしよう、『あごろ』に反発しながらも参加するのは、何かがあるからでしょう」とさらっとおっしゃっていただけたり、メンバーの方々のすばらしいお人柄に、会の後も爽やかさが残り、『人と人との出会いの大切さ』を思い、片側通行でもよい、尊敬かつ信頼でできることのありがたさを、目下〈あごろ〉でも体験しています。

## 婦人民主新聞 縮刷版

第一巻 1946年～1953年  
第二巻 1954年～1959年  
第三巻 1960年～1965年  
第四巻 1966年～1970年  
第五巻 1971年～1975年  
第六巻 1976年～1980年

女の戦後史がつまっています。  
資料としてお役立て下さい。

頒布価額 400000円(全6冊)

(送料込の価格です)

送金先

郵便振替

東京8・196455

婦人民主クラブ

銀行振込

富士銀行青山支店

普通預金65282

婦人民主新聞 近藤悠子

## 婦人民主クラブ

東京都渋谷区神宮前3-31-18  
電話 03(402)3244

〔連載〕②

## 働き続けた四十年（講演録）

辻 和子

松岡洋子事務所では昭和二十六年まで働きましたが、その頃、ネフローゼという体中に水がたまる難病にかかり入院いたしました。その時に松岡さんが再渡米されて留守だったので一応松岡事務所をやめました。その後、なにしろ食べていかなければなりませんから、つてがありまして、スポーツニッポン、今でも出ておりますがスポーツニッポンの東京本社広報部に、いわゆる赤伝採用といってアルバイトで採用してもらいました。

広告の校正などは、以前出版社で技術を習っておりましたから、すぐできたのですが、外の広告の外勤の人たちがやっている仕事を見ると、それはなかなか大変な仕事なのですが、給料が私たちの倍なのです。私は、お金がとんでも欲しいものですから部長に、その外勤をやらせてもらえないでしょうかというふうに願ひ出したら、「女に外勤などできないよ」と一笑に付されてしまいました。仕方なく、かくなる上は内勤を一生懸命やろうと思つてやつておりました。そうしていると工場のおじさんが部長に、あの子はよくやるから給料を上げてやりな、と言って、実際に活版や活字工や植字工のおじさんたちのアドバイスで給料が上がりました。その時の嬉しさは忘れられません。その上、あきらめていたのですが、新年宴会の時、部長から「辻君、外に出てみるか」と全く思いがけない時に思いがけないことを言われ、なかばあきらめていただけにうれしくて、ハイと言いましたら、外勤の人が口をそろえて言いますのに、「辻君が考えているほど外勤の仕事というものはナマやさしいものではない、君のために言うけど、そりゃあ、やめておいたほうがいい」。当時、七人、もう中年に近い男の人たちでしたが、みんなに反対されてしまいました。けれども私はもう前に一度部長に一笑に付されたことですから、このチャンスを逃したらもうないと思ひましたので、「お言葉ではございますがやらせていただきます」と言いますと、外勤の男の人たちに、「辻君は思つたより強情だね、君のためを思つて言っているのに、あえて外へ出ていこうと言うのなら、もうお得意を一軒も分けてやらないか

ら自分で新規開拓をしない」と言われてしまいました。部長も、あえてその人たちに、お得意を分けてやれとは言わないわけで、私は、それから毎日道を歩いていても何かスポーツ新聞の広告になるものはないかと、そればかりさがしました。ある時、電車の中吊りに東鉄のスキー・スケート列車の広告がありまして、その広告の下半分に『ウィンタースポーツガイド』という本の広告が目にとびこんできました。ああこれはもらえろと思ひまして、有楽町の交通公社、今でもありますが、その交通公社に行きまして、棚の中からその本を出してもらい、奥付けを見て出版社名を頭に入れました。まあ当時、その本を買うお金も惜しかったのです。それくらい貧乏でしたから、本を棚に戻すすぐに、その出版社に行きました。『スポーツニッポン』を出して、「電車の中で広告をみました、こういう新聞に出ると、とてもお宅の本のためにいいですよ」と言いますと、びっくりしていたその出版社の社長といいますが、おやじさんが二段四つ割の広告の原稿をくれました。広告料金が当時で七千七百円という広告を初めてもらって、本当に嬉しかったです。

しかし相変わらず外勤の人たちは誰も仕事を分けてくれませんから、次から次と新しい広告を見つけなくてはなりません。ある時、フイリピンからバスケットチームが来るというので、「歓迎フイリピンバスケットチーム」という全三段の大きい広告の企画を自分で考えました。それにはフイリピンに關係のあるフイリピンエアラインズ、バスケットがとても強い東京海上火災、バスケットシューズを作っている興国化学という靴屋さん、その三社の企画広告をしようというわけです。自分で企画しているうちに、もうもらったように胸がワクワクしたのですが、東京海上火災などは普段、新聞にも広告を出していないので、ウチはスポーツ新聞の広告など要りません、とあっさり断られました。

で、全三段の夢はしぼんだのですが、最後にフイリッピンエアラインズというのはジャパンタイムスに飛行機の広告を出しておりましたから、あそこならと思つて、行つて、そして広告をもらいました。五段四つ割と言ひまして、新聞は十五段ありますから、かなり大きい五段のよこ四分の一で細長い広告だったのです。でも当時は大変不景気で広告がとれず、その一面はオリシャンウイスキーの全三段の赤広告を入れて体裁をつくっていた時代です。その裏側に私のとった広告がひとつポツンと出て、その横つちよにちよと映画の案内広告が出ただけでしたから、私のとってきた広告がとても目立ったのでしょね。部長は、その広告を男の外勤の人びとに見せまして「女の辻君でさえ、

これだけの広告をとってくるのに、いったい君たちは何だ」、というふうに男の人たちにハッパをかける材料に使うのですね。それで私は、男の人と同じように仕事をしようと思うと、いかに男性の抵抗に合わなければならぬかを思い知りました。その時は部長が私のことを材料にしてハッパをかけるものですから「何だあいつは！」というふうな感じで口もきいてくれませんでした。でもこの経験は、あと放送局に入ってから仕事をしていく中で、男と同じに仕事をしようと思っただけに男の人の強い抵抗にあうかという面で、よい経験になりました。

ちょうどそのころ、NHKの『勤労婦人の時間』というラジオの第二放送で、「経済的独立は婦人を幸福にするか」という論文募集がございました。私はその当時、女子大を出た妹と、今は推理小説作家になっている従妹と三人で、三千円ずつ給料から出し合って働きながら暮らしていることや、お互いの誕生日にはお花など飾って祝い合うとか、私は大変音楽が好きでしたから、当時、メニューヒンが来日したのですが、昭和二十六年のそのころ切符は千円もし、とてもお金を出してメニューヒンを聞きに行くことはできませんでしたので、家にあった唯一の英国製の毛布を質に入れてメニューヒンを聴きに行ったとかを、いわば生活綴り方風に書いて出しましたところ、「これは大変具体的でよろしい」ということで、藤田たきさんと中島健蔵さん、武田清子さんのお三人の選者だったと思いますが、選ばれて一等になり、NHKから三千円の賞金がおくられて来ました。当時の私の給料が七千円でしたから三千円という額に、放送局というのは何とお金持ちだろう。何とかして私は放送局に入りたい、と思ひ込むようになりました。そのあとNHKの『勤労婦人の時間』のプロデューサーの高橋喜久江さんと知りあいになりまして、ある時、『勤労婦人の時間』でお昼休みのひとときという番組を作るから、近藤書店の前で「本を買いたいんだけど買えないわ」ということを言ってくれないかと言われました。それはもう今の私の実感だからお安いご用だわと、今でいう「ヤラセ」なんです。そのころは「サクラで出て！」ということで出るようになりました。アナウンサーが出てきて「何かご本がほしいんですか」と言いますから「ええ、でも給料が安くてなかなか買えないわ」と申しまして、それが放送されましたら、その放送をきいて、高橋喜久江さんのところへ「この間の『お昼休みのひととき』に出ていた人がもし實在の人なら、ぜひ本を送りたい」と言ってきたらどうか。と連絡が入りました。「それはどういう人ですか」と聞きましたら、日光に住む人で胸を病む東大生という。それはもう胸がドキドキしまして「ぜひ送って下さい」と言いましたら蜜柑箱いっぱい岡本かの子や三木清の人生論、岩波文庫などがギッシリと詰まっていた。

それで私はもう、ますます放送のもつ影響の大きさにおどろき、何とすばらしいことかと、これは何としても放送局に入りたいと思ひまして、ひそかに、そのころ民間放送が出来たてでしたから、まずラジオ東京の前身のラジオ日本というところに行きましたら、もうラジオ日本の開局委員会に山のような履歴書がきていました。これはもうダメだと思つて、そのあと、文化放送のアナウンサーの試験というのがありましたので、願書などいろいろ揃えて、ひそかに出しておきまして、受験番号四三二番という通知をもらいました。

いよいよ明日は文化放送の試験というその日に、スポーツニッポンの職場で、当時貧乏していましたが裏がゴムのズツクの靴をはいていたのですが、誰かが水を撒いていたんでしようね、転びましてものすごい勢いで尻もちをついたんです。はずかしいものですから笑おうとしたのまで覚えていますが、尾骶骨をしたたか打ちまして、もうそこでスーッと氣を失つてしまいました。毎日新聞社の看護婦さんが来て強心剤を二本打つて、やっと氣がついた時、ああ明日は文化放送の試験、こうなったら完全に会社を休めますから文化放送の試験に行ける、と思ひました。でも、とてもじゃないけど起き上がれないな、と思つたのですが精神力で起き上がりまして、父のステッキをつき、座布団を持つて行きました。

「実は昨日尾骶骨を打つて痛いので試験場で座布団に座らせて下さい。ステッキもつかせて下さい」と申しましたら、ずいぶんへんな受験者だなあと思つたらしいのです。今でも忘れませんが、文化放送の試験官の方が「ただ今までの方を見ておきますと、皆さん態度が粗野でいらっしゃいます。カルチャーがありません」というものですから、私は、まあ何とキザなことを言う人だろうと思つたのです、それが、後でラジオ九州に入ってみると文化放送ですごくエライ方でした。

文化放送の試験は上智大学で行なわれ、延々三千人近く、おおよそ二千九百人くらい受けまして、最初は「私の理想」という題で一時間の作文、あとは十五分間で自分がアナウンサーになつたつもりでアドリブを。「銀座」と、ほかにもう一題何かあつたのですが、私は、「銀座」をえらびました。

筆記試験は何とまあ合格しました。薄暗がりに四三二番をさがしました。四三二番は三で割り切れるから受かるかもしれないと思つて見たその番号。もう何か胸がドキドキするくらい嬉しかったですね。けれども、ご承知のようにアナウンサーの試験を受けるのは、とてもおこがましい話で、音声試験でものの見事に落ちてしまいました。(続く)

# 見たぞ!! 恐怖の観閲式

山口 のり子

十月二十六日の、自衛隊朝霞訓練場での観閲式の日、観閲式反対のデモに子連れで参加するつもりだった。しかし子どもになぜデモに出るのかを説明するうちに、「待てよ、近くに住んでいるのに観閲式を見たことがない。その恐ろしさを、この目で確かめる必要があるだろう」と気がついた。幸い前日になって、入場券が二枚手に入った。

人相の悪い右翼たちの「憲法改正、核装備」など恐ろしいシュプレヒコールを聞きながら、一時間前に会場に入ると、もうほとんどいっぱいの人。招待席、遺族席、外人席の人々は手に日の丸を持っている。そして中央には、すでに四千人の自衛隊員が、それぞれの制服に身を固め、ズラッと立ち並び、微動だにしない。目の前の部隊は、迷彩服で銃剣を持っている。その物々しい雰囲気は息子はおびえ、「おかしな怖いや」と言っすり寄って来た。私は彼に言った。「よく見ておき、これから始まることを。あの人たちは戦争をするための訓練を受けている人たちで、これから出て来るのはみんな人殺しの道具なんだよ。テレビの戦争まんの本物がこれなんだよ」と。

観閲台の首相が軍備増強を叫んだ後、行進が始まると、その一糸乱れぬ行進に、「さすがピタッと揃っているねえ」「カッコいい」など、興奮気味の声がまわりから聞こえて来る。肩の高さまで手を振り、靴音を響かせた行進は、戦時中の軍隊のイメージとびつたり重なる。行進のどんじりは、スカートをはいてバッグを持った婦人自衛官で、ここでも女は男の後だ。

行進の後は飛行部隊。編隊がゴォッと低く通り過ぎる度に「オー」と観声が上がると、あの一機一機に爆弾やミサイルを積んでいるかと思うと、飛行機の腹がやけに無気味に見える。恐怖のクライマックスは車両部隊だ。かなりのスピードで部隊がドドドと地響きをたてて走り抜ける。ロケットやミサイルを積んだ大きな車両が次々に通る度、日の丸が振られている。「どうして人殺しの道具に日の丸なんか振るのかね」「なんでかっこいいのかしらね」、こう言い合っているのは息子と私だけ。後ろに座った六十歳ぐらいの男が、大きな弾砲が通った時、「オーすげえなあ、あれがズドンといったらおもしろいだろなあ」と言うではないか。あきれて振り向いてまじまじと顔を見てやった。それ以後その男の声は、一言も聞こえなかった。本当に恐ろしいのは、この兵器を人殺しの道具と思わないで、その威容に感心し興奮する人々の感覚だ。こういう感覚の人たちに日の丸を振られながら、旧日本軍はアジアの人たちを殺しに行ったのだから。

式後の展示場では、子どもたちが戦車によじ登ったり、探知器で地雷探しをして遊んでいた。子どもたちに戦争の道具を身近なものに感じさせるのが目的なのだろうか。子どもたちに自衛隊をカッコいいと思わせて、将来の兵隊を集める準備をしているのだろうか。人殺しの兵器に囲まれて、親子連れがのんびりお弁当を揚げ、戦車や地雷で遊び、平和な家庭に帰って行くというのか！

車両部隊のドドドドという無気味な地響きが、まだ胃のあたりに残っているようだ。

◆夫婦別居の配転、不当労働行為で無効、全面勝訴に

「あごら大阪」の沢田和子さんたちが支援していた朝日海上火災の配転訴訟は、神戸地裁民事六部で九月十二日、「組合活動家を狙った単身赴任、不当労働行為」として企業側が敗訴になりました。三児と実母をかかえて働く妻が夫の任地に同行できず会社と異議を申し立てたのに聞き入れられず単身赴任となったもの。最高裁が七月に「単身赴任は特段の事情がない限り権利の乱用にならない」との判決を出し、共働き家庭にショックを与えていただけに今後の影響が注目されます。

◆宿直も全く男性なみに

日本テレビ報道局の女性記者、ディレクターは、六月上旬、泊まり勤務を希望する要望書を提出、九月一日から「①勤務シフトは前月の25日までに明示 ②宿直手当を支給する ③妊娠中の者は免除 ④産後一年未満の者は申し出があれば免除 ⑤宿直室は二人部屋一室を女性記者優先室として確保するが、三日前に名簿を提出しないと使用を認めない ⑥モーニングコールは女性に限り行なわない」などを条件に実施を開始。今後子供持ちが出たときが問題と、社内は賛否両論。

◆パートの中心は四十代の主婦

十月三十一日労働省が発表したパート労働実態調査（社員三十人以上の企業四千社、八千人を対象に昨年十月実施）によると、パートの九五％が女子で、主婦は九二％。年代は、①四十代前半 ②三十代後半 ③四十代後半の順。年収は①九十一百二十万円（二〇％）②六十一八十万円（一九％）③八十一九十万円（二八％）で、課税対象となる九

十万円以上は三五％だが、「九十万円を超えても働く」人は三五％で、「休む」一七％を上回り、総体に「今の仕事を続けたい」人は八九％で勤勞意欲満々。収入の使い道は、①生活費の補てん ②自分の化粧品・衣服等 ③子どもの教育費がベストスリーで、在職期間も四五％が三年以上。しかし残業のある企業が三三％もあるのに、採用時に残業の有無を明示する企業は七〇％だけ。雇用期間の明示も七八％で、退職金が出るのは一二％のみ。

◆男女産み分けは「遺伝病回避に限る」

日本医師会は、同会の生命倫理懇談会の見解を受けて歯止めをかけ、「当面は希望者に広く適用することは見合わすべき」と発表。

◆寸劇の出張・出前いたします

五年前から始まった「オットコ一座」は、「男の子育てを考える会」の活動。「男一度やったらやめられない」「男の育児書」など、当たり狂言も増えて、ますます人気。注文は、小金井市本町31118 042388116327 星さんへ。

◆朴寿南さんが映画『もうひとつのヒロシマ』を完成

茅が崎の店を売り払って資金を調達、被爆韓国人の実態をなまなましく伝える16ミリカラー（五八分）を完成。上映希望の方は、0466

369980へ連絡を。

◆「零歳児保育がないのは市の怠慢」訴訟敗訴

東京小平市に対する共働き夫婦の訴訟に対し、東京地裁は、「市は保育施設の整備拡充を図る政治的責任はあるが、甚しい怠慢はなかった」と棄却。夫婦は控訴。

## あぐらのあぐらのあぐらのあぐらのあぐらのあぐらのあぐら

◆109号の「指紋押なつの問題とへあごろ山口」の私たち」はフェミニスト運動と指紋押なつ問題のつながりを簡潔に表現しています。李幸宏さんの話は、聞いててとてもよくわかりました。何よりの収獲は、この外国人登録法は日本の法律であつて、在日朝鮮人という人たちの問題というより、私たちの、私の問題だとわかつたこと。矢野百合子さんの文章は読むにつれ彼女の怒りが移ってきて、机のひとつもたたきたくなりました。すごく同感。説得力のある内容です。

110号の「あとがきにかえて」は、この号で最も共感しました。自分の内の障害者差別を追及していくとき、いつもこまできてはたと止まつてしまふ。他の人からも明快な説明を受けたことがない。また「ある人の価値観が他の誰かの存在を脅かすことがあるのだからか」というのも、へあごろの活動をしていた常にあるところだ。私たちが進めようとしている社会運動には自分なりのはっきりした価値観があるのですが、それ自体が他の人への圧力になっていると感じますから。「みんないっしょに生きたいね」の子どもの検診は私も感じていました。三か月検診は仕事休んでまで連れていくことないなと思ひ、

受けていませんが、あの通知は義務のような感じを与えます。入学時の視力検査で、0.7だから眼科で再検査をするようにとのこと。

ふだん遠くのものもよく見えているのになと思つたけど、医者のおKがないとプールに入れないと書いてあるので近くの眼科へ。小学生がいっぱいきていて、何種も検査して、最後にふつうの視力検査をし、「0.9、異常ありませんよ」で千数百円。ほとんどの子どもがそうでした。そして、そこは九月一日、七階建ての眼科だけの大病院が建ちました。

「テレビから」の「聞いていますヨ、赤ちゃんは」について。この番組を見てないので自信を持つては言えませんが、これを載せた主旨はいい何なのか。私も決して気軽に中絶するのがいいこととは思えませんが、それを減らすのは、中絶の部分だけを切り取って悪だ悪だと言うことじゃないでしょう。この番組の主旨は何か。タイトルを見てもうさくさい感じ。「なんと深い母子の絆、生命の輝き」に至つては、まるで生長の家の台詞じゃないですか。この番組への批判の一言もない。最後に全体を通しての感想として、月刊がとても充実してきたように思います。

(福岡 三好久美子)

### 〔編集後記〕

「佐世保のメンバーがどんどん減つてゐるんです。転出する方が多くて……」

十一月号の編集を引き受けた佐世保の内田さんからの遠慮がちな電話でした。造船不況の深刻さは東京では想像もつかないほどのよう。そこへ原潜の寄港……。

財政ピンチの町と核の受け入れは、先月号で提起された幌延の問題と全く同じ。造船だけでなく鉄鋼・石炭・自動車など企業城下町はどれも不況の風が吹き荒れ始めているようです。

専業主婦控除、パート減税など、女性の福祉が向上しそうな掛け声ですが、行革が必要な国家財政の破綻の中で減税がもし可能なら、財源はどこに求めるのか。「広く薄く」に方向転換される「戦後税制の抜本的改革」のゆくえも心寒いことです。

各地からの地に足のついた報告は、大都市居住者の視点だけでモノを考へることの危険を鋭く警告してくれます。佐世保の方々の「言外之言」を心深く受け止めたと思います。

さて、「特集」はまだなのか。「財政にも人命にもムリのない方向で……」を打ち出した今年度の方針に真つ正直に従うと……。この苦境も一緒に考へていただかせんか。(事務局)